

(Ⅳ-42) 農村集落における農家の建物配置がつくる道路空間特性の定量的把握

(株) ハヤテ・コンサルタント ○正会員 稲崎 昇一
山梨大学工学部土木環境工学科 正会員 大山 勲
山梨大学工学部土木環境工学科 フェロー 花岡 利幸

1. はじめに

住宅地の道路空間は単に通過するための空間ではなく、住民にとって生活空間であり、公共空間であり、さらに、原風景や地域のアイデンティティーを形成する空間であるといえる。特に農村の道路空間は日本の原風景のひとつであり、重要な景観である。しかし、その形態は定量的に十分示されているとはいえない。道路空間の形態は、道路線形や幅員などの道路縦断方向の形態と、沿道の建物などによってつくられる道路横断方向の形態に分けることができる。農村集落の道路を歩くと、均質的な近年の住宅団地と異なり、蔵などの建物の接近した閉鎖空間と、庭による開放空間が次々と現れ、変化に富む独特の雰囲気をつくりあげている。

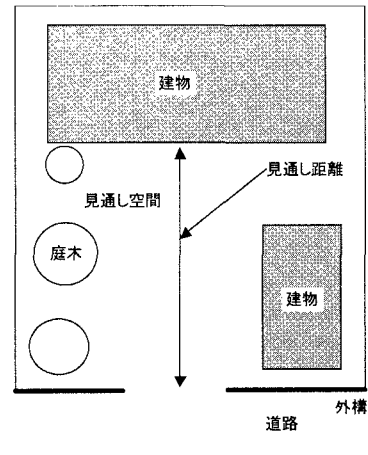


図. 1 見通し空間

2. 目的

そこで、本研究は、農村集落の道路空間特徴のうち建物配置によってつくられる沿道の空間特性に着目し、その実態を定性的・定量的に明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

①研究対象

甲府盆地に立地し、「短期的な計画による形態ではない非計画的な農村集落」、「平坦地に立地する集落」、「モータリゼーション以前の道路形態を持つ集落」の3条件を満たす横根、東吉田、沢登、休息を研究対象とした。これらの集落は中世に起源をもち、そこに住む農民によって少しずつ形成・改変され、明治期の道路をほぼ受け継いで現在に至る集落である。

②分析方法

道路空間の構成要素を建物、外構、庭木とし、出入り口から見通すことができる空間に着目した。この空間を見通し空間と呼ぶことにする。(図.1)

見通し空間の構成要素の見え方を類型化し、定性的な把握を行う。次に見通し空間の大きさとして見

通し距離を計測し、定量的な把握を行う。これらの結果より道路空間特性の考察を行う。

4. 見通し空間の見え方（定性的把握）

見通し空間の見え方を「アイストップ」、「空間用途」、「視点場の状況」で捉えた。(表. 1)

アイストップは、南入りでは主屋が多く、外構や付属屋は少ない。一方、その他の出入り口では外構または付属屋が多く、主屋が少ない。アイストップは出入り口方位によって差が見られる。

空間用途は、北入りのみ庭への通路として使用されるのが多いが、その他の出入り口では庭として使用されている。

視点場の状況は、低い外構の隙間が約半数を占め、視点場は開放的な状況にあるが、沿道に接した建物の隙間や門（建物型）などにより視点方向を制限させ、閉鎖的な状況の場合もある。

見通し空間の見え方と建物配置の典型例(表2、図3、4、5、6)から道路空間の特性を次のように理解することができる。

農家は基本的に農作業のための空間として主屋前面(南)に庭をつくる。そのため、できる限り主屋をLOTの北側に配置されることで見通し空間は開放

キーワード：農村集落、道路景観、沿道空間

連絡先：山梨県中巨摩郡竜王町篠原1436-1 (株)ハヤテ・コンサルタント設計部

表. 1 見通し空間の見え方

項目	南入り	北入り	東入り	西入り	合計
アイストップ	54 (81%)	2 (12%)	3 (7%)	0 (0%)	59 (36%)
主屋	6 (9%)	1 (6%)	1 (2%)	0 (0%)	8 (5%)
付属屋	4 (6%)	6 (35%)	5 (11%)	12 (34%)	27 (16%)
樹木+付属屋	0 (0%)	1 (6%)	3 (7%)	3 (9%)	7 (4%)
外構	2 (3%)	5 (29%)	8 (17%)	8 (23%)	23 (14%)
樹木+外構	1 (1%)	2 (12%)	26 (57%)	12 (34%)	41 (25%)
空間用途	63 (94%)	2 (12%)	45 (98%)	34 (97%)	144 (87%)
庭	4 (6%)	15 (88%)	0 (0%)	1 (3%)	20 (12%)
通路	0 (0%)	0 (0%)	1 (2%)	0 (0%)	1 (1%)
カーポート	-	-	-	-	-
視点の場	-	-	-	-	-
低い外構の隙間	-	-	-	-	78 (47%)
高い外構の隙間	-	-	-	-	50 (30%)
沿道に接した建物の隙間	-	-	-	-	30 (18%)
門(建物型)	-	-	-	-	7 (4%)
サンプル数	67 (100%)	17 (100%)	46 (100%)	35 (100%)	165 (100%)

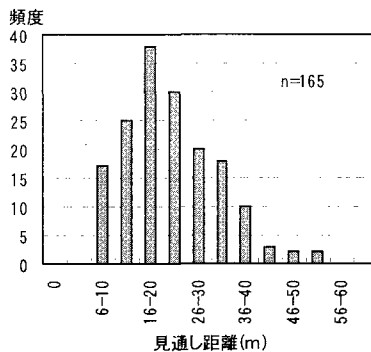


図. 2 見通し距離の大きさ

表. 2 建物配置の典型例

	南入り	北入り	東入り	西入り
アイストップの見え方	庭→主屋	庭→(樹木)→外構	庭→(樹木)→外構	庭→付属屋
道路側から見た付属屋の配置	主屋より道側	主屋より道側	主屋より道側	主屋より奥
主屋の見え方	庭の奥	付属屋に隠れる	道に面する	道に面する
沿道の建物配列パターン	庭-建物	建物-通路-建物	建物-庭-建物	庭-建物
サンプル数	50	5	22	9
構成比	(75%)	(29%)	(48%)	(26%)

表. 3 見通し距離の大きさ

	全LOT	南-主屋	東西-外構	東西-付属屋
平均	22.0m	16.9m	28.9m	17.6m
中央値	21.1m	15.5m	29.5m	18.2m
標準偏差	±9.9m	±7.5m	±9.0m	±6.7m
最小	6.3m	6.5m	15.1m	6.3m
最大	54.0m	39.7m	54.0m	35.0m
分布形	対数正規	対数正規	対数正規 or 正規	正規

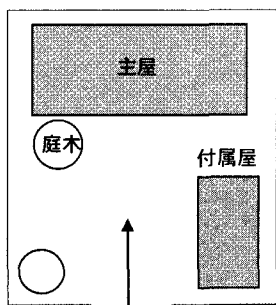


図. 3 南入り

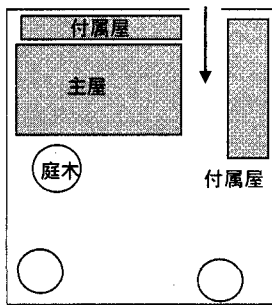


図. 4 北入り

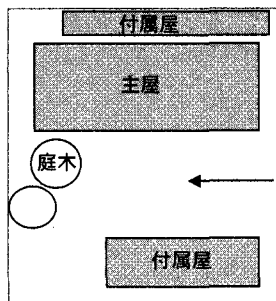


図. 5 東入り

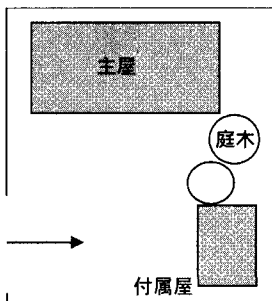


図. 6 西入り

空間となる。敷地の有効利用(庭の大きさの確保)、主屋の日照、庭との接続を満たすように付属屋は庭を取り囲み道路に張り付くように配置され閉鎖空間を生み出す。したがって、道路の沿道は開放と閉鎖の空間が連続し、変化のある空間が生まれる。また、図3、5、6のように北入り以外の見通し空間の大きさは庭の大きさである。

5. 見通し空間の大きさ(定量的把握)

表2、図2から全LOTの見通し距離の中央値は21mを示し、分布形は対数正規分布であった。また、

「南-主屋」、「東-外構(庭木)」「西-外構(庭木)」の見通し距離の中央値はそれぞれ17m、29mで、分布形は全LOTと同様に対数正規分布であった。

対数正規分布は、人間の大小感覚に合った分布¹⁾と言われており、都市の規模、様々な施設規模など自然発生的に決定される規模分布に表れる分布である。したがって、非計画的な集落において見通し距離が対数正規分布となることは納得ができる。

今回計測された見通し距離の中央値は、ヒューマンスケール(顔の認識限界距離=24m)に近く、最大でもその2倍程度である(知人かどうか分かる限界距離=50-60m)。つまり、人間相互の親密なコミュニケーションができるスケールであり、その距離は、道路と庭、あるいは建物の軒先との間のコミュニケーションを可能にさせる。

6. まとめ

甲府盆地の非計画的に形成された農村集落において沿道農家の建物配置がつくる道路空間の特性を明らかにした。見通し空間のスケールはコミュニケーションに適したスケールであり、対数正規分布でばらつく変化を持ち、このような庭のつくる開放空間と建物が接近する閉鎖空間が繰り返される沿道景観が甲府盆地における農村集落の特徴である。

参考文献

- 1) 岡田 光正 他(1988)、新建築学体系13-建築規模論一、彰国社、P14